

旧チェコスロバキアにおける大学寮の機能に関する考察

救済と統制のメカニズム

石倉 瑞恵 (非常勤講師)

Function of the University Dormitory in Czechoslovakia : Relief and Control Mechanisms

Mizue ISHIKURA

はじめに

東欧社会主義が崩壊してすでに20年近くが経過しようとしている。チェコ共和国(旧チェコスロバキア)は、近年EUに加盟し、社会、経済、文化、教育、あらゆる次元においてヨーロッパ化を遂げている。旧社会主義ということばすら、幻のように感じられる変化ぶりである。

社会主義を検討しようとする試みは、チェコにおいても、また西ヨーロッパ諸国においてもほとんどなされていない。チェコでは、社会主義の時代はふりかえることのない過ちなのである。例えば、チェコの高等教育研究は、高等教育のEU化、ヨーロッパ高等教育圏に向けての高等教育改革というテーマに関心が絞られている。社会主義に関する研究は、各大学が新しく編纂した大学史の中の数ページに記されている程度である。カレル大学650年史を記した『カレル大学史』¹⁾(*Dějiny Univerzity Karlovy*)は、社会主義時代に多くのページを割いている研究の一つであるが、歴史書としての記述的な性質にとどまっている。

しかしながら、歴史に投げかけられた一つの挑戦を、現在及び過去の視点から比較検討することには、十分な意義があるのではないだろうか。40年間の短い実験は、実現の困難な理想の一つであったからである。そこには、理想 女性や、幼児、労働者等、弱者を救済するという理想があった。例えば、社会主義は、女性の地位を向上させ、女性の勤労を奨励し、保育制度を充実させた²⁾。また、かつては高等教育への門戸が閉ざされていた労働者階級、農民出身者にその門戸を開いた。多様な大学を設立し、様々な制度を設けた。勤労しながら高等教育を受ける、いわば「社会人入学」枠を大幅に拡大した。さらに、留学生のための大学を設立³⁾、アフリカ諸国からの留学生を積極的に受け入れた。高等教育は、女性、勤労青年、途上国の学生等、まさに多くの弱者に対して門戸を開いたのである。

理想のいくつかが実現したとはいえ、社会主義を生きた人々は、幸福を得ることができなかった。それは、理想の実現には、イデオロギーによる裏づけがあり、次第にイデオロギーが一人歩きを始めたからである⁴⁾。

本稿では、高等教育組織の中で大きなインパクトをもっていた「大学寮」に焦点をあて、社会主義制度の弱者救済としての機能と、その背後にあるイデオロギー性との関係を解明しようとする。本研究に用いた資料は、大学寮設立当時の政策文書、統計資料、大学寮について分析している社会主義当時の論文等である。

本論文の構成は以下の通りである。社会主義以前の大学寮、共同住居・施設について考察し

その後、社会主義期における大学寮設立の背景と設立の経緯を明らかにする。そして、大学寮の組織・構造を分析することにより、その機能を明らかにしようとする。

1 社会主義期以前の大学寮、共同住居・施設の特徴

チェコスロバキア大学の歴史は長く、大学の起源は14世紀にまで遡ることができる。しかし、この長い歴史の中では、学生の福利問題が検討されることはなかった。学生の福利及び住居問題への関心が芽生え、寮、様々な形態の共同住居、福利施設が設置されるようになったのは、第一次世界大戦によってチェコスロバキアが独立を勝ちとり、第一共和国(1918-1938年)となってからである。

20世紀初頭、大学生の多くは比較的裕福な中産階級出身者が占めていた。しかし、第一次世界大戦後の物価上昇により、中産階級出身の子弟にとっても、学費、生活費を捻出することは難しくなり、中には経済的理由から留年を余儀なくされる学生もいるほどであった。当時の学生は、地元出身者が多かったが、約3割は親元を離れて暮らしている学生だったという。彼らは、主にフラットを借りて生活しており、住居費が大きな負担となっていた⁵⁾。

学生生活を援助する組織としては、唯一「自助団体」(Svépomoc)があり、家庭教師や翻訳などの仕事を斡旋していた。学生は、アルバイトによって学費や生活費などを稼いでいたのである。

このような戦後の特殊な状況の中で、プラハ、ブルノ等大学都市において、大学寮設置を求める声があがった。当時設置された大学寮の例をみてみることにする。

1919年、カレル大学、チェコ工科大学という2つの古い大学があり、学生数が最も多いプラハにおいて、チェコスロバキア初となる大学寮が設置された。プラハの学生約2,000人がデモを起こし、執政の場であるプラハ城に結集して彼らの住居問題の深刻さを訴えた結果、学生が勝ちとった寮であった。寮として提供されたのは、かつては拘留所職員の施設として使用されていた建物で、当時の大統領の名をとってマサリク寮(Masarykova kolej)と名付けられた。マサリク寮は、初年度には376名の学生に住居を提供した⁶⁾。

マサリク寮を契機として、プラハには様々な形態の共同住居、施設が現れた。1921年には、「学生コロニー」(Studentské kolonie)が設立された⁷⁾。これは学生団体が自ら建設した木造の共同住居で、学生が管理・運営を行いながら共生していた。また、1922年には政府が「学問の家」(Akademická doma)を開設した。学問の家は、当初メンザ(Menza、大学食堂)として機能し、次第にクラブ、集会所、図書室、スポーツジム、プール等の機能を備えるようになった⁸⁾。しかし、ここは学生の生活基盤となる住居施設を備えていなかった。

また、プラハに次いで学生数の多いブルノでは、1920年頃、軍隊が病院として使用していた建物を学生が譲り受け、寮として活用しはじめていた。6棟の建物に合計260名が住んでいた。1923年に軍が建物の返還を要求したため、大学の教員、学生が主体となって新しくカウニツォヴァー寮(Kaunicova kolej)を設立した。「大学の教員、学生が主体となって」と言うのは、カウニツォヴァー寮建設の費用は政府が支給するのであるが、建設資金の約4分の1は、民間の寄付によって賄うようにという条件がつけられていたからである。民間からの寄付を集めたのは、学生であった。彼らは、一口10コルンの寄付を募り、建設資金の4分の1強にあたる180万コルンを集めたとされている⁹⁾。また、工学部の教授が寮を設計、建設し、さらには寮の管理者となった。

このように、大学は全て国立であるが、大学寮の設置者は必ずしも「国」ではなかった。学生が大学寮の必要性を強く感じているにもかかわらず、大学寮は依然として学生各自が解決する問題であった。

これらの大学寮における生活環境は、理想には程遠いものであった。多くは、古くからある建物を寮として転用したため、多数の学生が共同生活をするうえで必要な環境、設備が整っているわけではなかった。寮内の生活環境もまた、学生が各自で整備し、解決する問題であった。

第一共和国時代には、大学寮が姿を現したのだが、大学という組織の中で市民権を得るまでには至らなかったと言える。設置者、管理者、管理運営方法、収容する学生数、寮内の生活環境等、様々な要素について検討した上で、計画的に設立されたのではないからである。すなわち、大学寮は、高等教育政策の中で確固たる位置付けを得ていなかったのである。

2 社会主義大学寮の成立過程

(1)大学寮設置の背景

第二次世界大戦後、社会主義政権に移行すると、大学寮は高等教育政策の一環として認識されるようになった。それには、次のような背景がある。

第一に、大学数の大幅な増加である。特に、1950年代前半には、技術大学、農業大学が、産業都市や交通要所となる都市に続々と設立された。技術大学、農業大学は、社会主義国家として発展する上で不可欠な技術、農業水準を支える知的基盤とみなされたからである。大学のある都市は、戦前にはわずかに5つ、大学数は9校であったが、これらの大学の設立により、1953年には大学のある都市は22に、大学数は36にまで増加した¹⁰⁾。大学都市は大都市プラハやブルノのみならず、新しい地域、都市にまで拡大したのである。そこで、それらの新大学都市においても大学寮を設立する必要が生まれた。

第二に、技術大学、農業大学の設立に平行して、学生層が広がったことがある。元来、大学へ進学する学生の多くは、中産階級出身者であった。1920年頃には、学生の出自は20%が富裕階級出身者、50%が中産階級出身者となっていた¹¹⁾。労働者階級・農民出身者はわずかに5%から7%にすぎなかった¹²⁾。社会主義政権は、労働者・農民を社会主義技術革新の担い手に育て上げる目的の下、技術大学・農業大学のターゲットを労働者階級・農民出身者に定めていた。1949年から1954年にかけて、労働者階級・農民出身者を対象とした『労働者のための高等教育への準備教育』(Státní kursy pro přípravu pracujících na vysoké školy)を設け、大学進学への予備教育を行うことで、労働者階級・農民出身者の高等教育就学率を高めようとした。この数年間の準備教育の結果、労働者階級・農民出身学生の割合が著しく上昇し、1961年になると41.3%にまでなったと言われている¹³⁾。大学寮は、学生総数の半数近くを占める新しい学生層、すなわち労働者階級・農民出身学生の住居と生活を保障するために必要となったのである。

労働者階級・農民出身者の高等教育就学率を高めることは、社会主義国家の発展につながる課題であった。したがって、高等教育への門戸を開くのみならず、入学後の彼らの生活を保障すること、すなわち、大学寮の設置は、社会主義の存続を左右する重要な課題とされたのである。

(2)大学寮の設置と制度化過程

1948年から1953年にかけての5年間は、高等教育改革のラッシュ期と言える。大学数と学生数の急増に呼応して、急きょ大学寮が手配された。しかし、このラッシュ期には、大学寮への質的配慮はまだ行き届いておらず、利用可能なスペースにできる限りの学生を収容しているにすぎなかった。寮における学生の生活も改善されたとはいえなかった。特に、それまで大学がなかった都市の大学寮を整備することには、非常な困難を伴った。ホテル、教会、初等学校の一部空きスペース、廃墟となった城等使用できる建物を活かして何とか寮としていたが、中にはガスや電気設備がなく、学生が各自で手配しなければならない場合や、一部屋に6人から8人が詰め込まれている場合もあった¹⁴⁾。

大学寮の設立が本格的に開始したのは、1953年5月、共産党第10回大会において大学寮設置に関する決定が行われた後であった¹⁵⁾。わずか数週間の後には、全国各地に新しい大学寮が姿を現した。全ての寮が数週間から半年で完成するほど¹⁶⁾、大学寮の建設は集中的に行われた。



図1 1960年代設立のカレル大学の寮（フビェズダ寮）

出典：Havránek, Jan, " Univerzita Karlova v letech 1953-1969 " ,
Havránek, Jan, Pousta, Zdeněk, *Dějiny Univerzity Karlovy* ,
Univerzita Karlova Vydavatelství Karolinum, Praha, (1998) s.309.
注：写真の建物は3棟のうちの1棟である。

大学寮は、効率を重視した社会主義大学建築の典型的様式である。直線的で装飾が少ない巨大な建築物が何棟も重なっているスタイルである。図1では、社会主義大学寮の一例を示した。これは、1960年代に設立されたカレル大学のフビェズダ寮（Kolej Hvězda）である。大学建築には、設立の時期や地域による大学ごとの個性があるが、大学寮建設は規格化されたプロジェクトによって全国一斉に進められたため、全国の大学寮は同じような形態となった。画一的なのは外観のみならず、窓やドア、階段等の内装にまで至っている。直線状の廊下の両脇に部屋を並べる形態、階段等の幅を狭くする等、建設に必要とされるコストを極力抑えながら、一つの建物の中に可能な限り多くの学生を収容できるスタイルがとられていた¹⁷⁾。社会主義以前の大学寮は、数棟でせいぜい数百名を収容できる程度であったが、社会主義時代の特に後期の大学寮は、1棟で1,000名近くを収容できる大規模なものとなった¹⁸⁾。

1950年代から60年代にかけて、大学寮のキャパシティはどのくらい増加したのか、大学寮と寮生の増加に着目してみる。大学寮は、1951 / 52年度には76であったが、60 / 61年度には118に、大学寮に住む学生は、51 / 52年度には16,316名であったが、60 / 61年度には39,246名になった¹⁹⁾。全学生に占める寮生の割合を見てみると、51 / 52年度には29%であったが、53 / 54年度には45%に、そして63 / 64年度には64%にまで上昇した²⁰⁾。

全国的に大学寮の建設を進める一方で、1953年には大学寮に関する規定が定められた。『大学寮規定』(Rad pro koleje vysokých škol)は、寮生活における学生の義務、権利、大学寮の管理運営方法等について規定していた。『大学寮規定』は、全国規模の規定であり、大学寮は高等教育制度の中で確固たる位置付けを得ることになった。また、この規定によって、大学寮は外観のみならず、管理運営に至るまで画一性を帯びるようになった。

3 社会主義大学寮の機能

(1)大学寮における生活保障

大学寮が完成すると、学生は、在学期間中の住・食に対する十分な保障を得ることができた。学生の生活は大きく改善されたと言える。

まず、当時の学生が寮生活に要した費用について考える。寮費は非常に安価であった。大学寮費は『大学寮規定』によって全国一律に定められ、学生が支払う寮費は実際の大学寮経営費の約3割とされた²¹⁾。次に、食費である。学生は、大学寮に併設されたメンザにおいて、質の高い食事をわずかな支払いでとることができるようになった。参考に、その他の福利制度もとりあげて、当時の学生生活を総合的に把握してみる。学費は無料であり、その上に様々な奨学金を受けることができた。教科書の貸与や、学用品の支給、衣料品購入のための現金支給もあった²²⁾。交通費、様々な文化活動には、学割制度が適用されたため、それらへの支出もほんのわずかであった。すなわち、住居から食事、学費、余暇活動に至るまで、学生生活全般へ配慮し、学生の金銭的負担が極力少なくなるような制度が整えられていた。

次に、大学寮における生活環境を考える。各学生の生活の拠点となる部屋は「ブニェク」(buněk)²³⁾と呼ばれる二人部屋が主であった²⁴⁾。部屋にはベッド、毛布、シーツ、机、棚等生活に必要な備品が備え付けられており、各階には共同のキッチン、シャワー、トイレの設備があった。ハウスキーパーが、各部屋の清掃、備品の整備、電球等の消耗品の交換まで行って各部屋を管理するとともに、厳しく学生の生活を監督していた。また、大学寮には、メンザ以外の様々な設備も備え付けられていた。クラブ、スポーツ施設、視聴覚室、図書室、勉強室、郵便局等である。学生が大学生活に集中できる環境が整えられ、学生の生活条件は、飛躍的に向上したと考えられる。大学寮における生活環境、例えばブニェクという部屋のスタイル、ハウスキーパー制度等は、今日のチェコおよびスロバキア大学においても定着しているが、大学寮費、寮のメンテナンス、食事の質等を考えると、社会主義時代の方がはるかに優れていたと言われている。

(2)大学寮の教育機能

一方で、このような大学寮における学生の生活環境は、図2「大学寮管理運営の組織化」に示したように、全国一律の大学寮管理運営方法によって管理されていた。寮の管理運営は、「主幹寮」(vedoucí kolej)、「寮委員会」(kolejní komise)、「主幹フロア」(vedoucí poschodí)の3つの組織が段階的に行っていた。「主幹寮」は、いくつかの棟の中で一つの棟(の職員)が担当した。主幹寮の役割は、寮内のメンテナンス活動の統括と、学生や寮の職員の管理・観察であった。主幹寮が問題だと感じた点は「寮委員会」の議論に上った。学生、職員の問題、その他様々な寮の管理運営に関して寮委員会で決定された事柄については、学生、職員は従わなければならない。寮委員会、主幹寮ともに、学長(学部長)の承認が必要であった。すな

わち、この管理制度は、大学の教育活動の一貫であると言えるのである。一方、「主幹フロア」は、各棟の学生の側に置かれた管理運営組織であった。主幹フロアは、主幹寮の承認の下に所属の棟の整備、管理運営に努めた。

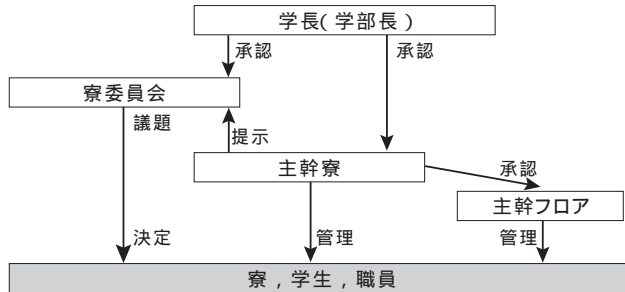


図2 大学寮管理運営の組織化

出典：“Rád pro koleje vysokých škol”(Výnos ministerstva školství č. j. 75 295/53 ze dne 4. listopadu 1953), Erben, Jan a kol., *Vysoké školy, Informácie o štúdiu*, Slovenské pedagogické nakladateľstvo, Bratislava (1962), ss.76-77.より作成。

「主幹寮」、「寮委員会」、「主幹フロア」は、何1,000人も(25)の学生と多くの職員を管理し、寮の秩序、清潔を保つという機能を果たしながら、学生に対する管理統制、すなわち教育機能をも担っていた。ここでの教育とは、学生の態度・価値観育成に関するもので、「イデオロギー教育」と言いかえることができる。『大学寮規定』の中では明記されていないが、例えば共産党中央委員会(1973年)は、「学部および寮は、共産主義的教育発達計画における学生の人格形成の役割を果たす(下線部筆者)」と述べている(26)。学生が多くの時間を過ごす大学寮には、「共産主義的教育発達計画における人格形成」、すなわち社会主義的人間に向かわせるイデオロギー教育の機能が多いに期待されていたのである。実際、当時の学生は、大学寮に政治教育機能があることを強く認識していた(27)。このように、社会主義大学寮は、学生生活の保障機能とイデオロギー教育機能という二面性を孕んでいたのである。

(3)学生による自主的教育活動

イデオロギー教育は、図2に示したような管理組織の中で潜在的に行われていたのみならず、学生の自治的活動を通しても行われていた。大学寮には、学生の意思決定機関、自治組織として、社会主義青年連盟大学寮委員会(Kolejní rad socialistické svaz mládeže、以下「大学寮委員会」と略記)があり、寮生のための様々な課外活動、社会的、政治的、文化的活動を主催していた。図3「大学寮における自主的イデオロギー形成活動」は、大学寮の学生による自主的イデオロギー活動の組織図を示したものである。大学寮委員会とは、社会主義青年連盟の一部局である。社会主義青年連盟とは、大学生が自由意思によって加入する学生自治団体であり、旧ソ連のピオニールを模倣して作られた団体である。この団体に所属する青年は、共産党予備軍と言われていた。建設活動、政治・思想活動、文化活動、スポーツ、キャンプなどを組織し、それらの活動を通して、若者を社会主義建設へと方向付けることが活動の主たる目的であった。

大学寮委員会は、社会主義青年連盟の会員の中から、各寮に5人から9人の定員で寮生の選

挙によって選出された。この委員会は、大学寮を改善するために活動する自治組織と称し、学生が課外時間を「有意義に」過ごせるよう文化活動、社会活動、政治活動を組織していた。大学寮委員会は、寮内放送の権限を獲得し、全寮生に対して文化活動、社会活動、政治活動への参加を呼びかけ、社会主義青年連盟のプロパガンダを流していた²⁹⁾。

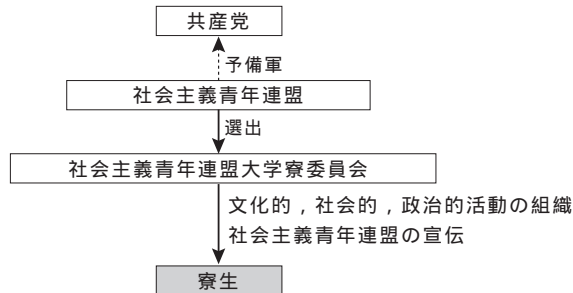


図3 大学寮における自主的イデオロギー形成活動

文化活動、社会活動、政治活動とはどのようなものであったのか。数多くの活動の中から代表的なものを以下にあげてみる²⁹⁾。文化活動には、音楽会、美術展の主催や参加、エクスカーション、例えば反ファシズムとして戦ったゆかりのある町を見学するという行事があった。社会活動は、生産性の向上を目指した勤労奉仕、若者の生産技術力を競わせるコンテスト、農業の収穫コンテスト、鉄屑収集、労働時間外での公共事業、道路建設、水道敷設への労働奉仕等であった。政治活動は、社会主義青年連盟の夜間学校への参加、壁新聞の作成等である。全ての活動は、寮生の課外時間を有効に活用することを目的とするという姿勢をとりながら、直接的、間接的にチェコスロバキア社会主義建設に貢献する内容であった。

以上のように、大学寮には、上から、すなわち管理運営レベルでの教育機能のみならず、学生主体レベルでの教育機能が組織されていたのである。入学当初には、政治的関心の低かった学生でさえも、この教育機能の二重性によって自然とイデオロギー活動へと組み込まれていったと言えよう。大学では、イデオロギー教育の一つとして全学必須科目の「マルクス・レーニン主義」が開講されていたが³⁰⁾、大学寮における生活全般でのイデオロギー教育は、「マルクス・レーニン主義」教育以上に効果をあげたことと考えられる。

まとめ

旧チェコスロバキア高等教育組織の中で大きなインパクトをもっていた大学寮について、その成立過程と組織を分析することにより、大学寮の機能の二面性、すなわち学生生活の保障機能とイデオロギー教育機能を明らかにした。この二面性こそが、社会主義制度が孕む「救済と統制のメカニズム」である。以下に、社会主義高等教育における大学寮の意義と大学寮の機能の二面性についてまとめる。

社会主義高等教育における大学寮の意義

大学寮は、社会主義政権が新しく設けた高等教育部門である技術大学、農業大学の発展を支える役割を果たした。技術大学、農業大学は、社会主義の発展を支える知的基盤として把握されており、高等教育政策における重点分野であった。この重点分野においては、地方の労働者

階級・農民出身学生に対して開かれた制度を設けることが、大きな課題であった。大学寮は、まさに開かれた制度の一つとして大きく貢献した。すなわち、大学寮は、技術大学、農業大学の発展、ひいては社会主義国家の進展に寄与するという意義が与えられていたのである。

大学寮の機能の二面性

大学寮の機能は、新しい学生層(労働者階級・農民出身学生)の生活を保障することであった。しかしながら、学生は生活の保障の見かえりとして、社会主義を支持する人間となることを求められた。すなわち、大学寮は、イデオロギー教育の機能を備えていたのである。イデオロギー教育は二つのレベルで組織されていた。大学寮の確固たる管理運営体制のレベル、および学生の自主的活動のレベルである。このように、大学寮には、学生生活の保障(救済)機能と、イデオロギー教育(統制)機能の二面的メカニズムが働いていたのである。

社会主義期に見られた様々な救済制度は、全て統制機能と表裏の関係になっていたと考えられる。例えば、アフリカ諸国からの留学生を集めた11月17日大学には、対資本主義的精神を身につけ、学位を取得して帰国したエリートを通して、アフリカ諸国に親社会主義の立場を広めようとする意図があったと考えられる。つまり、教育・学位の授与という救済機能と社会主義の伝播という統制機能が働いていたのである。

社会主義に対する数々の否定的な見解は、あらゆる制度に潜む統制メカニズム 社会主義の進展に伴い肥大化する部分、にのみ着眼しているのではないだろうか。救済と統制という軸で社会主義を分析することにより、見捨てられた過去の中に何らかの光を見出すことができるのではないか。女性解放、幼児教育等、社会主義に特徴的な制度に関して、この軸に基づいた分析を行い、社会主義の光と影をさらに解明していくことを今後の課題としたい。

-
- 1) Havránek, Jan, Pousta, Zdeněk, *Dějiny Univerzity Karlovy*, Univerzita Karlova Vydavatelství Karolinum, Praha (1998). をさす。
 - 2) 例えばクルーブスカヤは、社会主義体制が、労働者、農民の解放を実現し、経済的自立に基づく男性からの女性の独立を保障する体制であり、「子どもの扶養の心配を両親からとりのぞき、社会が子どもに生活費を保障するばかりでなく、子どもが完全に全面的に発達するために必要な一切のものを社会がもつように配慮する」体制である(『婦人労働者』)と述べている。
 - 3) 1961年に設立された11月17日大学である。「11月17日」は、1939年のその日に、ナチスがチェコスロバキアの全大学を閉鎖し、抵抗した多くのチェコスロバキア学生を処刑したり強制収容所に連行した日である。チェコ人、スロバキア人学生の英雄的行為を称えてこの名称がつけられた。
 - 4) 1999年に『カレル大学史』の編者であるヤン・ハブラーネク氏に聞き取り調査を実施した。「50年代のチェコスロバキアには夢があり、それほど悪い状態ではなかった」と述べていることから、社会主義の進展に伴い、イデオロギー的な腐敗が進んだことがわかる。
 - 5) Havránek, Jan, “Univerzita Karlova, rozmach a perzekuce”, Havránek, Jan, Pousta, Zdeněk, *Dějiny Univerzity Karlovy*, Univerzita Karlova Vydavatelství Karolinum, Praha (1998), ss.29-30.
 - 6) Ibid., s.30.
 - 7) Ibid.
 - 8) Ibid.
 - 9) Franěk, Otakar a kol., *Dějiny České vysoké školy technické v Brně, 1díl-do roku 1945, Vysoké učení technické*, Brno (1969), s.184.
 - 10) Státní úřad statistický, *Statistická ročenka republiky československé*, Orbis, Praha. 1938年度s.248と1958年度ss.357-360.
 - 11) Havránek, Jan, *op.cit.*,s.29.

- 12) Holubec, Luděk, *University education in Czechoslovakia*, Orbis, Prague (1963), p.11.
- 13) Ibid.
- 14) Vyšinka, Antonín, “Materiální podmínky školy a sociální rozvoj”, Čech, Vladimír a kol., *Na prahu nové etapy 40 výročí VSSE v Plzni*, Vysoká škola strojní a elektrotechnická, Plzeň (1989), s.140.
- 15) Belluš, Emil, “Na okraj výstavby študentského domova v Bratislave”, *Orgán Ministerstva školství, Vysoká škola*, Ročník 2 (1-2), Praha (1954), s.75.
- 16) 大学寮がきわめて短期間で完成したのは、大学の工学部が設計を担当し、企業が実作業にあたるという方法で進められたからだと言われている。また、全ての大学寮が規格化した建築物であったからでもある。
- 17) Belluš, Emil, *op.cit.*, s.77.
- 18) 大学寮は、1970年代後半になると再び不足状態になり、1970年代後半から1980年代初頭にかけて二度目の大学寮建設ラッシュ期を迎えた。その時設立された大学寮は、1950年代60年代設立の大学寮をさらに改良したスタイルとなった。1970年代の大学寮は、より高層の建物となり、1棟あたりに収容できる学生数が飛躍的に多くなった。(Vyšinka, Antonín, *op.cit.*, s.141.)
- 19) Státní úřad statistický, *op.cit.*の1959年度s.426とÚstřední úřad státní kontroly a statistiky, *Statistická ročenka Československé socialistické republiky*, Státní nakladatelství technické literatury, Praha. の1961年度s.439.
- 20) Státní úřad statistický, *op.cit.*の1959年度s.418, s.426とÚstřední komise lidové kontroly a statistiky, *Statistická ročenka Československé socialistické republiky*, Státní nakladatelství technické literatury, Praha.の1964年度s.421, s.432から算出。
- 21) Matejíčková Helena, Malý, Pavel, *Higher education in the Czechoslovak socialist republic*, Státní pedagogické nakladatelství, Praha (1981), p.57.
寮費は、二人部屋では50コロンであった。参考として、当時の物価をいくつかの品目の価格で示すと、ミルクは1ℓで2コロン、パンは1kgで2.6コロン、ソーセージは1kgで25から60コロンであった。(Vronský, M., *Study in Czechoslovakia, Guide for students from abroad*, Orbis, Prague (1959), p.23.)
- 22) 技術大学の場合、奨学金は月額500コロン、衣料品購入用の支給が年2回各350コロン、学用品購入のための支給が年1回で350コロンであった。(Ibid., p.21.)
- 23) “buňka” から派生した単語で、もともとは「細胞」の意味である。
- 24) Koudela, Jiří a kol., *Vysoká škola ekonomická v Praze, Nositelka Řádu práce 1919 - 1953 - 1989*, Vysoká škola ekonomická, Praha (1989), s.64.
- 25) 職員には、ハウスキーパーのほか、電気管理者、水道管理者等様々な専門職員が含まれていた。
- 26) Předka, Milan, “K problémům výchovné ve vysokoškolských kolejích v Československu”, Předka, Milan a kol., *Komunistická výchova ve vysokoškolských kolejích*, Státní pedagogické nakladatelství, Praha (1988), s.34.
- 27) Ibid.,s.43.
- 28) Koudela, Jiří a kol., *op.cit.*,ss.64-65.
- 29) Slamková Blanka, *Abeceda svázákeho funkcionára*, Smena, Bratislava (1976), ss.72-91から抜粋した。
- 30) 各学部にマルクス・レーニン主義学科が設置されていた。学生は、毎年度講義と演習を習得しなければならなかった。1年目は、共産党の歴史(ソビエト共産党とチェコスロバキア共産党の歴史)、2年目は、マルクス主義政治経済学、3年目は、マルクス哲学、4年目は、マルクス主義の視点による現代政治問題解釈であった。(石倉瑞恵、「チェコスロバキア高等教育におけるイデオロギー教育に関する一考察 1950年代のマルクス・レーニン主義学科の組織・機能を中心に」、日本高等教育学会編、『高等教育研究第4集』(2001) 144頁.)

Abstract

The socialistic mechanism of relief and control was considered through the analysis of the organization and the function of the university dormitory in the Socialist Czechoslovakia.

Before the socialist era, when the middle class people were given the privilege of higher education, it was the students who had to cope with the problem of their housing. It was not until after W.W.

that the dormitories and the other institutions for the students were established. But it was still the students who took the initiatives to establish the dormitories. The living conditions in those dormitories were not adequate. It is said that the government had less interest in the students' welfare. The dormitory was not situated in the higher education system.

In the socialist era, the 1950s, many higher education institutions, mainly technical colleges and agricultural colleges were established. Higher education became the intellectual basis that contributed to raise national industrial and agricultural productivity and the centers to train workers and farmers into the experts who would bear the socialist technical reform. The dormitory, the security of students, was needed in order to raise the enrollment of the students from the workers and farmers who had not had enough chance for the higher education before. The dormitory became an important element that supported the socialist higher education and the continuation of the socialist nation.

From 1953, dormitories appeared in all the cities that had universities and colleges. The capacity of dormitories was raised drastically. In 1951, the proportion of the students who lived in the dormitories was only 29 %, but by 1963 it had grown to 64%.

In 1953, also "the regulation for the university dormitories" was established, by which the condition of dormitories became uniform nationwide. The dormitory was defined in the socialist higher education system.

The living condition in the dormitories became favorable. The dormitory was now a component of the students' welfare system. The students could live with less living expense during their enrollment.

In order to control all the staff and the students and to maintain order and cleanliness inside the huge dormitories, there was a strict administrative organization. This system also contributed to form the students ideologically.

The students were ideologically educated in two levels; the first was by the organization that administered the dormitories, the second was by the students' voluntary activities held by the dormitory council of the Socialist Youth League (SYL). The dormitory council organized varieties of cultural, social and political activities, which were to contribute to the construction of socialism, for the students to make good use of their free time at the dormitories.

It is concluded that the university dormitories had two functions, which supported the development of the socialism. Firstly, the dormitories worked as a welfare system to support the students' life. Secondly, the dormitories worked as an ideology formation system to train the students into supporters of socialist ideology. The two levels of ideological formation, administrative and voluntary, made the students much more favorable toward socialism. It can be said that the relief and control mechanisms worked in the socialist dormitories.